

やさしく、わかりやすく、おもしろい数学雑誌を

亀井哲治郎（亀書房）

Tetsujiro Kamei

●花森安治と『暮しの手帖』

NHK の朝の連続ドラマで、稀代の編集者・花森安治が話題となった。私はこのドラマが始まる少し前に、ふとした偶然から花森さんの伝記（津野海太郎著『花森安治伝』）に触れ、編集者としてのすがたに深い感銘を受けた。そして、花森編集長のもとで仕事をした編集者の本、唐澤平吉著『花森安治の編集室』、小樽雅章著『花森さん、しずこさん、そして暮しの手帖編集部』も読んだ。

いろいろな感慨をもったが、そのなかで、雑誌『暮しの手帖』の記事のつくりかた、とくに文章の書きかたについて強い印象を覚えた。

たとえば料理の記事。

プロの料理人がじっさいに料理をしつつ、作り方を説明する。編集者がそれを文章にまとめる。こんどはその文章を読んだ別の編集者が、じっさいに料理を作ってみる。まちがいや説明の足りないところなどを修正して書き直す。また作ってみて、文章を直す。これを何度かくりかえすのである。

こうして、だれでもが料理を作れる文章ができあがる。

またたとえば、唐澤さんの『花森安治の編集室』の「文章は話すように書け」という章には、文章やことばについて花森さんが言ったという語録が載っている。いくつか引いてみよう。

「きみの書いた文章が、八百屋の奥さんにそのまま読んでもらえるか、魚屋の奥さんにわかってもらえるか、それを考えて書け」

「教えてやろう、というようなニオイのする文章がいちばんイヤシイ。読者とおなじ視線に立って、文章を書け」

「やさしく書いたからといって、わかりやすいとはかぎらん。書いている本人がその意味を正しく理解していないと、わかりやすい文章にはならんのだ。一知半解の人間に、わかりやすい文章は書けん。一知半解、二歩後退というんだ」

わが家でもかつて『暮しの手帖』を購読していたので、私もあれこれと読んだが、たしかにどの号も、わかりやすい文章ばかりだった。そのような雑誌ができ

あがるには、その裏側で、どれほどの苦労や苦心がなされていたことか、改めて考えさせられたのである。

●『数学セミナー』創刊のころざし

さて、話を数学の世界に移そう。

私は1970年4月に(株)日本評論社に入社し、数学セミナー編集部配属となった。それ以来、日本評論社で32年、定年前に退社して14年の計46年間、数学関係の雑誌や書籍の仕事に携わってきた。

この仕事を続けながら、私がずっと感じ続けてきたことのひとつが、雑誌でカバーすべき数学の主要テーマと数学研究の最前線との距離が、しだいに広がっていく、ということだった。

とくにここ20年くらい前からは、数学それ自身の高度化・抽象化がより急速に進んだように感じられるし、また数学の他分野への応用が以前には考えられなかったようなところまで及んでおり、その広がり具合がますます大きくなっているように思えるのである。

めまぐるしく展開する数学世界を仰ぎ見ながら、数学雑誌はどのように構えていけばよいのだろうか。

「いわゆる受験雑誌ではなく、大学初年級に基礎をおいて、教育問題をはじめ、広く数学のトピックスを紹介する雑誌を創りたい」

これは『数学セミナー』の初代編集長である野田幸子さんが、新しく雑誌を始めるにあたって遠山啓先生に編集顧問をお願いに行ったときのことばである(野田幸子「編集会議での遠山先生」)。1961年初夏のことだった。この基本スタンスは、創刊からずっと引き継がれている(と思う)。

これを敷衍するかたちで、創刊号(1962年4月号)の巻頭に遠山さんが「数学と現代文化」を書いた。

「この雑誌は数学と現代文化や現代生活との接触から生ずる多種多様な問題を積極的にとりあげて行くようにしたい」

「科学技術はいうに及ばず社会科学から芸術に至るまで、現代文化のあらゆる局面に数学が登場してくることは、20世紀後半の特徴であろう。このような時代に活動するためには、ある程度の数学を身につけることがどうしても必要になってくる。そのことに気づいて、おくれればせながら数学を勉強しなおそうと思っている人々は多い」

「この雑誌はそうした人々の役にも立つようにしたい。新しい数学を学ぶのに昔のように曲りくねった道を通る必要はなく、もっと手軽な近道がいくらでもあ

る。そのような近道もできるだけ公開するようにしたい」

21世紀のこんにちでも、数学に関わる局面がさらに多種多様になったことを補えば、ほぼそのまま通じるようである。

●雑誌がだんだんむずかしくなっていく

数学雑誌づくりの基礎は、あくまでも「大学初年級」である。あるいは高校数学から理工系1年～2年生程度といってもよいだろう。そして、想定する読者は、大学生や一般の数学愛好者であり、中学・高校の教師はもちろんのこと、できれば高校生にも読んでもらいたい。

そのように「大学初年級」に基礎を据えながら、「数学のトピックス」あるいは「数学が登場するあらゆる局面」として、たとえば現代数学の最前線のさまざまな様相を紹介しようと考えてことがある。多くの読者が関心をもつであろうテーマだから、積極的に取り組むべきなのだが、じつはこれがなかなか悩ましい問題なのである。

まず、登場する概念がどれもむずかしい。定義を読んだだけでは、それが何を表しているのか、イメージすら湧かない。重要な結果や定理の意味がまるでつかめない。……

そこで、書き手に工夫してもらうのは、高校・大学初年級の数学を念頭に、読者にイメージをつくってもらうために具体例をいくつも入れながら、いわば“助走”にあたることをたっぷりと書いてもらうことである。助走部分を読んで、読者が「この先もおもしろそうだ。読んでみよう」と期待するようになれば、しめたものである。

しかし、そうなると、原稿の分量は大きく膨らまざるを得ない。だが、雑誌のページ数は無尽蔵ではない。

「近ごろの『数学セミナー』は、むずかしくなったね」と、じつは私が携わっていた1970年～1989年のあいだでも、親しい数学者から何度も指摘されたものだった。その印象は、おそらくいまも変わらないだろう。

私がまだ駆け出しの編集者だったころ、先輩から、「『数学セミナー』のような雑誌は、婦人雑誌と同じで、春になれば春の料理やファッションを、夏になれば夏の料理とファッションを、そして次の年の春になればまた春の料理とファッションを、というふうに繰り返す努力が必要だ」というようなことをしばしば言われ、なるほどと感心した。

感心はしたけれども、同じテーマの繰り返しでは、多少は新しい視点や切り口を加えるとしても、やはり飽きが来てしまう。作るほうがそうであれば、読むほ

うもそうにちがいない。編集者の意識がしだいに成長していくとともに、雑誌もまた次第に成長してしまう。そういうことがありそうな気がする。

数学雑誌がだんだんむずかしくなっていく、ということは避けられないのだろうか。

この問題は雑誌のありかたにとって大事なテーマなので、もっときちんと考えてみたい。宿題としておく。

●やさしく、わかりやすく、おもしろく

花森安治や『暮しの手帖』のことと数学雑誌のありかたとは、かなり距離が隔たった話になったかもしれない。まとまりをつけにくくなったが、最後に、私のささやかな夢を記しておきたい。

それは「やさしく、わかりやすく、おもしろい」数学雑誌がほしい、ということである。

あくまでも、高校数学や大学初年級の数学を基礎に据えて、「やさしく、わかりやすく、おもしろい」ものでなければならない。おとなの眼から見た小学校数学(算数)もテーマになりうるだろう。数学研究の最前線のむずかしいことは、もし「やさしく、わかりやすく、おもしろく」書けるなら入れてよいが、無理をせず、ほかの雑誌にまかせてもかまわない。

この雑誌は、すべてのページが読んでわかるものであることをめざしたい。

むかし、私が『数学セミナー』編集長になって間もないころ、

「いまの『数学セミナー』を、もっとやさしく、わかりやすくすれば、少なくとも5万部は売れるはずだ」

と、遠山啓先生からいわれたことがあった。「やりようによっては、それ以上でも」というニュアンスが込められていたと思う。

もしこのような数学雑誌がこの国に存在して、いろいろなかたちで数学が普及して人々の役に立つならば、それほど喜ばしいことはない。

見果てぬ夢かもしれない。しかし、こころざしをもった編集者や出版社が現れることを期待したい。